

天皇陛下の御即位十年に際し(平成11年) 宮内庁HP

皇太子の親友たちは、休業中の金谷ホテルを借りきってそこに収容された。学習院初等科五年生としての授業は、東大日光植物園の建物を教室がわりにして行われた。金谷ホテルから教室までは、隊伍を組み、軍歌を歌いながら通うのが常だった。

昼食は、級友たちは、金谷ホテル製の弁当を食べ、皇太子には、御用邸で大厨が作った特別弁当が届けられた。加藤英明「天皇家の戦い」(新潮社、一九七五年刊)には次の記述がある。

「他の生徒たちはホテルがつくった弁当を、丸いアルミ箱に入れて持ってきたが、皇太子は昼になると、御用邸から内舎人が、紫の袱紗に包んだ黒の漆塗りの重箱を教室まで運んできた。そして、内舎人が魔法瓶をあけて、やはり漆の御碗に赤だしを注いだ。他の生徒の弁当も、食糧事情が悪くなったとはいえ、最後まで米飯であったし、おかずもかならず何かついてはいたが、皇太子の弁当に、美しい卵やきや肉が入っているのを、羨ましそうに盗み見ながら食べた」

しかも日光の山下とはいえ、冬になると内陸部の寒さはきびしいものがあつた。「ご学友」の一人は、次のように回想している。

「秋から冬になると、私たちのいた金谷ホテルは暖房がなかったから寒くてたまらない。栄養失調気味のところへもってきて寒気だからとてもこたえた。ところが、御用邸のはうには電気ストーブの暖房があつたのだ。そこで、さすがに見かねたのか、冬になったら御用邸のなかの日本間を教室にすることにされたのです。ですから御用邸へ通学するのが楽でした。もっとも考えてみると、暖房のない植物園内の教室へ皇太子殿下をいれて、風邪でもひかせてはという心配があつたのでしょうけど」(千田夏光、前掲書)

しかし皇太子にも悩みはあつた。その時の級友の一人新波正直は語っている。

「とにかく破綻は大変でしたよ。食糧が不足していて、途中からはおかゆでした。カビのはえたタタミが出たこともあります。ホテルは、日本間ばかりで、一部屋に十人くらい押しこめられてました。そう、私たちと、上の学年とで、二百人くらいはいたでしょう。皆例外なく栄養失調で、タムシなんかできちやうって……。あの頃は、面会日が定められていて、その日には東京から父兄が訪ねて来て、一日いっしょに過ごしたんです。皆近くの植物園へ行って家族と持参の弁当で食事をしました。ある面会日のとき、私たちがそれぞれやって来た家族と弁当を食べたら、殿下が馬に乗ってお付きの人と植物園に採まされてね。僕らは、馬に乗ってカッコいいアなんて思ったら、あとで殿下がその日のことを作文に書いたんですよ。「友達が家族の人と楽しそうにしてもらやましかつた……」ってね。考えてみりゃ、殿下のところには、誰も面会には来てくれないから……。彼のその作文を先生が読んでくれて、ああそうだったのか、寂しいんだなあ

(甲 2)

「同宿のいくらも年の違わない少年飛行兵は飛行機はもうないから、爆弾をかかえ、戦車に体あたりする訓練をする。すべてが皇太子にとっては生まれて初めての体験だった。なにより皇太子の心をゆすぶったのは、少年飛行兵たちの死ぬための訓練だったのだから。八月に入ってから、日光をおとすれた参謀本部第二部長有末精三中将に「なぜ日本は特攻隊戦術をとらねばならないのか」と質問をしているが、この時の体験と思考はおそらく今日の皇太子の思考の原点になっているのではないか」(千田夏光、前掲書)

天皇陛下ご即位十年に際し(平成11年) 宮内庁HP

天皇陛下

私の幼い日の記憶は、3歳の時、昭和12年に始まります。この年に盧溝橋事件が起こり、戦争は昭和20年の8月まで続きました。したがって私は戦争の無い時を知らないで育ちました。この戦争により、それぞれの祖国のために戦った軍人、戦争の及んだ地域に住んでいた数知れない人々の命が失われました。哀悼の気持ち切なるものがあります。今日の日本が享受している平和と繁栄は、このような多くの犠牲の上に築かれたものであることを心しないといけなと思います。



下殿子太皇
戦局に深き御關心
行幸先には御言葉

朝日新聞
1945年8月11日
慶び! 天地に満つる夜

民草の奉祝に
聖上いと御満悦
東宮様には御安眠

夜一第の山内大る漲氣瑞
御母子様
極めて御
御誕生

1933年
12月24日